

メコン委員会 諮問委員会第11回会議
議 事 録

昭和45年3月

海外技術協力事業団
開 発 調 査 部

JICA

100

61.7

KE

BRARY

国際協働事業団		
受入 月日	87. 6. 10	P100.00
登録 No.	No. 108627	61.7
		KE

国際連合

アジア・極東経済委員会

メコン河下流流域調査調整委員会

(カンボジア, ラオス, タイ国およびベトナム共和国)

諮問委員会第11回会議

1969年1月20日~28日, ベトナム共和国, サイゴン

メコン委員会諮問委員会第11回会議報告

内 容

緒 言

議長選挙

第1項—ビエンチャン/ノンカイ橋報告(第2段階)

第2項—メコン・デルタの農業開発に関する主計両作
成に関する提案要綱

第3項—タイ国およびラオスのメコン河の港湾, 積荷
処理, および小艇建造施設の可能性調査
(TCI報告)

第4項—バ・モン中間報告(第2段階)

第5項—示唆および批評のための1969年度セミナー
—提案:

- a) エンジニアリング・セミナー
- b) 経済および社会問題セミナー

第6項—バサック河の航行調査

第7項—委員会の次回会議の時と場所

第8項—その他の事項

JICA LIBRARY



1047130[8]

メコン委員会諮問委員会第11回会議報告
(1969年1月20日～28日)

緒 言

諮問委員会の第11回会議は1969年1月20日から28日までベトナム共和国サイゴンのマジェスティック・ホテルで開かれた。

会議にはR・A・ホイラー陸軍中將，ロバート・ジャックソン卿，およびP・S・N・ブラサド博士を除く全委員が出席した。

参加者の名簿は付属書類Iとして添付してある。

委員会の会議後，1諮問委員の要請により，メコン流域の重要な作業現場視察旅行が，メコン事務局によって組織された。視察計画の写しは付属書類IIとして同封してある。

1969年度メコン委員会の議長でベトナムの委員でもあるフム・ヒューー・ビン氏は諮問委員のサイゴン到着を歓迎する，短いステートメントを発表した。

議長選挙

1969年9月の会議において同年中の議長に選ばれていたホイラー陸軍中將が欠席したので，ポール・ブリュル氏が万場一致この会議の議長に選ばれた。

委員会は議事日程案および委員兼書記の提案した詳細暫定作業予定を承認した。

第1項—ビエンチャン/ノンカイ橋報告(第2段階)

委員会は日本の海外技術協力機関(OTCA)の第2段階報告を再検討した。

委員兼書記が，日本調査団，国家エネルギー庁(NEA)，タイ国有鉄道，タイ・ハイウェイ部，アジア・ハイウェイ輸送技術局の代表者およびメコン事務局員の間で，1968年11月21日バンコックで開かれた会議の詳細と，数日後ラオスで日本の調査団とラオス政府の各種部門の代表者の間で行

われた会議の詳細を説明した。

委員会は、調査は能率的で標準的な慣行にしたがって実施されたという意見である。報告は見事に提示され、数字や統計によって支持されている。委員会は特別の点に関してはつぎのような所見をもっている：—

- 1) 委員会は、報告に採り上げられている交通の発達に関する数字は合理的なものであることに同意する。
- 2) 同一橋脚上の鉄道と接続したハイウェイ橋は、ピエンチャンに至る鉄道は経済上の見込があるという仮定に立てば、他の型のものよりも経済的であるという、報告のなかの勧告に委員会は同意する。
- 3) 委員会は、橋からピエンチャンに至る鉄道ルートはC—D線形に沿うべきであることに同意する。
- 4) 地質状態は良好であり、建設に大した困難があるとは思われないことに、委員会は満足している。見積りは合理的なようである。
- 5) 川岸の護岸工事は最初から上流約50メートル、下流100メートルの長さとし、タイ側は計画造船所のところまでにすることが望ましいと、委員会は考える。護岸工事は承認があれば後日延長してもよい。
- 6) 委員会はさらに、経済的観点からして橋の建造は融資の手配ができ次第なるべく早い機会に承認されるものであることに満足している。
- 7) 左側通行から右側通行へ交通の円滑な転換を可能にするため、そして交通の流れが橋の許容力を最高度に利用できるようにするためには、アプローチの方法に特別の注意を払うべきである。この点に関し、また荷量をもっと平均化するには、鉄道線路の位置を検討し直すことが望ましい。委員会はラオスおよびタイの当局者が、できれば他国で行われている慣行を採用して、両国の税関ならびに移民施設を結合することはできないかを検討するよう提案する。日本チームは、タイ固有鉄道、タイ・ハイウェイ部、ならびに両国の税関および移民当局者に検討させるための各種の代替案を準備すべきである。

最後に、結論として委員会は、ピエンチャン／ノンカイ橋計画は技術的にも、経済的にも、また財政的にも健全なものであるという、委員会の意見を記録にとどめることを希望する。

委員会は、建設、運営および維持について明確な責任を有する団体には建設資金募集の便宜を与えるようにという意見であった。

橋、鉄道の駅や線路、または関連施設の所有、維持および運営に最適の団体の種類については、委員会は、これらの問題は近い将来国際的計画の法的、管理的方面に関する、計画中のセミナーか、それとも沿岸4ヶ国の共同チームが考究すべきものである、という意見である。

第2項—メコン・デルタの農業開発に関する主計画作成上の提案要綱

ベトナムの首席代表は、ベトナムの専門家とニューヨークの開発・資源協会の専門家から成る共同開発団(J D G)は1968年初めからこの問題を研究して来た、と委員会に報告した。彼らはメコン・デルタ地方の農業開発のいろいろな面に関する、10種類の基礎書類を作成した。ベトナムの首席代表は、これらの報告は1969年3月までには新聞社から入手できるものと期待していると述べ、メコン委員会および諮問委員会に検討してもらうため、その写しをメコン委員会に提供することを約束した。

ベトナム首席代表は、すでにJ D Gが行っている調査がその政府ならびにおそらくは諮問委員会によっても評価されるまでは、政府は、ベトナムのデルタ地方の農業開発について、他のいかなる調査も開始されることを望まないという意見であった。

彼はさらに、彼らの調査によるとスタン・トレン・ダム建設についてさえ若干の徴税が必要なこと、そしてスタン・トレン・ダム建設の可能性は遠い将来のことなので、J D Gが行った調査に照して徴税を行うことを、ベトナムは考慮中であると述べた。

堤防がカンボジアのデルタに影響を及ぼしそうではあるが、諮問委員会は、補足調査によってこの複雑な問題に関する知識を助長するため、オランダの申出を広く利用する余地があるものと考え、関係当事者ともっと討議を重ね、オランダが約束した寛大な申出を十分利用できるような適当な方法で、運営草案を修正するよう、メコン委員会に提議する。

第3項—タイ国およびラオス領メコン河の港，積荷処理，および小艇建造の
可能性調査（TCI報告）

委員会は，上記主題についてワシントン，D.C.の国際輸送コンサルタンツが作成した報告（1968年7月）と，1969年1月15日付の事務局の陳述書（WRD/MKG/INF/L.298）ならびに1969年1月7日付の封書を検討した。

委員会は，ルアン・ブラバンとバクセ間のメコン河航行改善計画に関する報告のなかの勧告を支持する。この報告書は一群の明確な小計画から成るものであるが，その小計画はいずれもつぎに掲げるその他の計画とは関係なく採り上げることができる。

- a) ヒュエイ・サイとルアン・ブラバン間，ルアン・ブラバンとビエンチャン間，ビエンチャンとサバンナケート間の水路改修工事

（USドル 917,000）

- b) ルアン・ブラバン，タナラエン，ノンカーイ，タケーク，およびサバンナケートの積荷処理施設

（USドル 880,000）

- c) ノンカーイ/タナラエン，サバンナケート/ムクダハルン，およびバクセ/ムオン・カオの車輦フェリーの改修

（USドル 693,000）

- d) タデウアの旅客上陸場の改修

（USドル 26,400）

合計USドル3,517,000

委員会は，TCIの報告が小艇建造問題をそれだけのものとしては提案していないが，河川用舟艇の修理，維持に関する技術的，職業訓練計画は勧告していることに注目した。

バ・モン・ダム計画やビエンチャン/ノンカーイ橋計画が上記提案に及ぼしそうな影響について，長時間にわたる討議が行われた。バ・モン・ダム計画は完成までにまだ長年月がかかるので，考慮に入れる必要は全くない，ということに意見が一致した。

ビエンチャン／ノンカイ橋については、報告は、その建設が提案に及ぼす影響を考慮している。だからといって、勧告された計画をやめる必要はない、というのが一般の意見であるとともに、ノンカイおよびタナラエンの積荷処理施設の正確な位置は、提議されている橋の位置と調和させるべきだということに意見が一致した。

T C I 報告で勧告されている短期計画は短期の当面の必要を充たすためのものであり、長期計画があるからといって廃棄することはできない、というのが一般の感情であった。

この計画のための資金入手に関する正確な情報は、新政府が予算案の審議を始めたらさっそく知らせると、U S A I D 代表から委員会に伝えられた。

委員会は、T C I 報告で勧告された計画は国民が必要とする重要施設や便益を提供しようとするものではあるが、国民が国の歳入を挙げる力は何となく物足りないと考える。この不安を考えてメコン委員会は、これらの計画に関する資金を補助金か、それともゆるやかなローンによって手配するよう、諮問委員会は勧告する。

委員会は、T C I 報告で勧告されている航行改善計画の作成、維持および運用について設置される組織に関し、報告が述べている提案を、きわめて長時間にわたり討議した。

委員会は、バ・モン、サンボール、ビエンチャン／ノンカイ橋および航行改善といった、メコン流域における国際的計画の開発に関連して、メコン委員会が直面する国際的法律問題や管理問題は、1969年8月25日から29日まで開催される全面的セミナーで討議されるものであることに注目する。したがって、委員会は、討議の結果およびセミナーの勧告に関する最終勧告を留保する。

委員会は、計画類はあまりに小さく、しかも広範囲にわたっているので、T C I 報告で勧告されているような、国際会社1社では能率的に管理できないのではないかと考えた。

第4項—バ・モン中間報告（第2段階）

T・ニブロック氏がバ・モン計画の第2段階に関し、5通の謄写版刷りの

報告を提出した。印刷した報告は1969年2月3日までにはできあがると氏は語った。氏は、第2段階の報告は主として水力発電に関するものであると説明した。この報告は、最近の数字によると同地域の原子力のコストは5.5ミルであるが、70%の発電率で運転する300万キロワットの発電力を設備するバ・モン計画は、電力料金がキロワット当り5ミルと定めれば、経済的にも引き合うことを明かにした。1970年1月までには灌漑も計画報告の中に含まれることになっている。

委員たちは、この重要な主流計画に関し手早く調査を片付けた努力に対し、賞讃の意を表したが、批判はもっと詳細に検討するまで留保した。

第5項—提案および批判のための1969年度セミナー案

(a) エンジニアリング・セミナー

委員会は、セミナー協議事項に提案されていたように、エーカーズ・インターナショナル、および日本工営が書類の作成を手配することに、世界銀行が同意したということを知って喜ばしく思った。

委員会は、建設会社による建設計画に関する書類もセミナーに含めることを提議する。

委員会は、セミナーが主要テーマとしてナム・グム計画を手配したことに、喜びをもって注目した。これはメコン流域諸国にとって、実際的な関心ある問題にちがいない。

委員会はまた、セミナーがメコン流域における核エネルギーの可能な役割について、まる1日を費やすことにしている点にも、興味をもって注目した。この動力源の討議は実に時宜を得たものである。

(b) 経済的、社会的セミナー

委員会は、メコン流域の多くの国際的計画の作成、維持、ならびに運用に含まれる、法律的、管理的面に関する討議は今や検討の礎も熟しているので、きわめて時宜を得たものであることを認めた。

委員会は、メコン委員のほか、法律および企画を担当する官庁の代表者も、セミナーに招待した方がよいと提議した。

委員会はまた協議事項について若干の変更も提議した。

第6項—パッサック河の航行調査

ベトナムの首席代表はベトナムの見解を説明した。彼は、メコン河の代りとしてではなく、戦時航行用としてパッサック河の調査を、ベトナムは提議しているのだと説明した。さらに彼は言葉を続けて、パッサック河の航行可能性調査の目的は、デルタ地方の統合開発という機構内においてばかりでなく、メコン河改修計画に基いて、国際的ならびに国家的航行のために、デルタ地方にあるメコン河の2支流の合理的利用について、勧告を行うためであると語った。

委員会議長は、デルタ地方に一般に見られる水文学的事情のために、パム—ナオ水路は、低洪水期から高洪水期にかけてやや不安定になることがあると説明した。したがって、いろいろな洪水状態について多年にわたる慎重な調査を行った上でなければ、はっきりした結論に到達することはできないだろう。

委員会は、メコン委員会がこの問題をその計画のなかに含め、いかなる財源からでも構わないが、資金が入手できるようになった場合には、このような調査を実行することを勧告する。

第7項—委員会の次回会議の時と場所

委員会の次回会議は1969年9月1日月曜日から9日火曜日までバンコックで開かれることが確認された。

第8項—その他の事項

な し

署 名

署 名 _____
(ポール・ブリエル)
議 長

署 名 _____
(アーサー・ゲイッケル)

署 名 _____
(フィルモン・ロードリゲス)

署 名 _____
(鈴 木 源 吾)

署 名 _____
(ビクターH・ウムブリヒト)

署 名 _____
(カンワー・セイン)
委託兼書記

国際連合

アジア・極東経済委員会

メコン下流域調査調整委員会

(カンボジア, ラオス, タイ国, およびベトナム共和国)

諮問委員会第 11 回会議

1969年1月20日 - 28日

ベトナム共和国サイゴン 1969年1月24日

委員会メンバーのカンボジア,
ラオスおよびタイ国訪問計画
(1969年1月28日~2月7日)

1969年1月28日(火)

正午 12時 AVNでサイゴンを出発し フナム・ベンに向う, 飛行
680キロ, フナム・ベン到着推定時刻は地方時間の
正午 12時。

午 後 ブレク・トノット計画および実験農場訪問。同夜フノ
ム・ベンに帰着。

1969年1月29日(水)

午 前 カンボジア政府関係者との会合。

午 後 自動車でフナム・ベンを去りシハヌークビルに向う。同
夜シハヌークビルに泊る。

1969年1月30日(木)

シハヌークビルを出発してフナム・ベンに向う(自動車
で)。途中キリロム計画訪問。

1969年1月31日(金)

午前 10時 AVNでフナム・ベンを去りバンコックに向う。飛行
680キロ

午前 10時 50分 バンコック推定到着時刻

午 後 休養

1969年2月1日(土)

自動車でバンコックを出発し、タイ国のナム・ボンおよびノンワイ計画訪問。
同夜をウドーンで過ごし、パーティ。

1969年2月2日(日)

ウドーン(タイ国)を自動車と小艇で出発し、ビエンチャン(ラオス)に向う。

1969年2月3日(月)

ラオス政府関係者と会合
ナム・グム・ダム敷地を訪問し、ビエンチャンに帰って(自動車で)同夜を過ごす。

1969年2月4日(火)

ビエンチャン実験農場およびADB開発予定地域訪問
(自動車で)。

1969年2月5日(水)

自動車(および小艇)でビエンチャンを出発してコーン・カエンに向う。途中ナム・ブン・ダム、カラシン農場、およびコーン・カエン・リサーチ・センター訪問。同夜をコーン・カエンで過ごす。

1969年2月6日(木)

自動車でコーン・カエンを出発し、バンコックに向う。

1969年2月7日(金)

委員会のメンバーは各自母国に向って出発。

国際連合

アジア・極東経済委員会

メコン下流流域調査調整委員会

(カンボジア、ラオス、タイ国およびベトナム共和国)

諮問委員会第11回会議

1969年1月20日-28日

ベトナム共和国サイゴン 1969年1月24日

参加者名簿

1. 諮問委員会

ポール・プリエル氏

アーサー・ゲイックル氏

フィルモン・ロードリゲス氏

鈴木源吾氏

ビクター・ウムブリヒト博士

カンワー・セイン氏 (委員兼書記)

2. ベトナム共和国

ブイーヒューーチュアン氏

ファムーヒューービン氏

トランーキユオクークイ氏

ニユーイエーンバンーソン氏

ビユマーキユオクーカーア氏

レーカンーチユーク氏

3. UNDP本部

R.カンブマイヤー氏

4. USAID

T.ニブロック氏

カール・リー氏

リリー・ヒュイン・シーエン嬢（通訳）

4. 共同開発団（サイゴン）

パート・カッター氏

メコン事務局

C . ハート・シャーフ博士（局長）

I . S . マカスバック氏

サマラム・ブンナグ氏

M . ハヤス氏

W . バン・リール氏

R . キンロッパホ氏

B . ウォールウエンド氏

デイ・チュートン氏

ニューイエン・シーヒエン嬢（国語に通じた書記）

